

《論説・動向》

## 地方医師は自らを語ったか ——世紀転換期ポーランド知識人と知のハイアラーキー——

福元 健之

### はじめに

戦後ポーランドで知識人（インテリゲンツィア）研究を牽引したリシャルダ・チェプリスーラステニス、知識人を「自身の知的労働によって生活する社会階層」と定義した<sup>1</sup>。この理解は、近年の通史にも受け継がれている<sup>2</sup>。ポーランド語に知識人概念を広めたと思われるポズナン（ポーゼン）の哲学者カロール・リベルトは、その有名な一節で知識人を、「学者として、官吏として、教師として、聖職者として、産業人として民族の陣頭に立つ。高等教育を受けたというまさにそのことによって、民族を率いるのだ」、と描いた<sup>3</sup>。ポーランドの知識人概念は、初期の時代から、専門労働と、民族あるいは政治のエリートという2つの要素に規定されてきたのである。上述の定義は明らかに前者に重きを置くものだが、社会的コミットメントを考察するなかで、後者は必然的に議論に組み込まれる。

こうした方法的構えのもと、ポーランドでは、トップ・エリートから底辺のインテリまでを射程に入れる社会史研究が進展した。社会学者ニーナ・アッソロドブライと、経済史家ヴィトルト・クーラから学んだチェプリスーラステニスの研究には、これまでに指摘されてきたポーランドの社会史的特徴が顕著である<sup>4</sup>。彼女は、ポーランド王国の医師を扱った際、傑出した人物の資料しか残らない開業医にのみ関心を払った従来の研究を批判し、「社会学的視角」から医師の全体像を描くことが可能な、官吏として政府に雇われた医師を分析した<sup>5</sup>。いまなお読み応えのあるこの論文は、やがて公表される彼女のモノグラフ、あるいは彼女が率いる共同研究の前ぶれであった<sup>6</sup>。

<sup>1</sup> Ryszarda Czepulis-Rastenis, «Klasa Umysłowa». *Inteligencja Królestwa Polskiego 1832-1862* (Warszawa: Książka i Wiedza, 1973), 13. これは、Stefan Kieniewicz, “Rodowód inteligencji polskiej,” *Tygodnik Powszechny* 15 [56] (1946): 1 を踏まえた定義である。

<sup>2</sup> Jerzy Jedlicki, “Introduction,” [in:] Maciej Janowski, trans. by Tristan Korecki, *Birth of the Intelligentsia 1750-1831: A History of the Polish Intelligentsia*, Part 1 (Frankfurt am Main: Peter Lang Edition, 2014), 12.

<sup>3</sup> Karol Libelt, “O miłości ojczyzny,” *Rok 1844 pod względem oświaty, przemysłu i wypadków czasowych* 1 (1844): 53 から試訳。以下でも引用される。Czepulis-Rastenis, «Klasa Umysłowa», 6-7; Jerzy Jedlicki, trans. by Tristan Korecki, *The Vicious Circle 1832-1864: A History of the Polish Intelligentsia*, Part 2 (Frankfurt am Main: Peter Lang Edition, 2014), 94. 下里俊行「インテリゲンツィア」社会思想史学会編『社会思想史事典』丸善出版、2019年、382頁。

<sup>4</sup> 早坂真理「ポーランドの社会史研究——“社会の周縁性”をめぐる」『北大史学』23号、1983年、27-34頁。小山哲「社会所得分配理論から封建制度の経済理論へ——歴史学における「ポーランド学派」の系譜」『西洋史学』159号、1990年、52-67頁。

<sup>5</sup> Ryszarda Czepulis, “Lekarze urzędowi (1832-1862),” [w:] *Spółeczeństwo Królestwa Polskiego*, t. 3, pod red. Witolda Kuli (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1968), 47-88.

<sup>6</sup> Czepulis-Rastenis, «Klasa Umysłowa»; *Inteligencja polska pod zaborami. Studia*, t. 1, pod red. Ryszardy Czepulis-Rastenis (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1978); *Inteligencja polska XIX i XX wieku. Studia*, t. 2-6, pod red. Ryszardy Czepulis-Rastenis (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1981-1991).

このように、医師は知識人研究において重要な位置を占めてきたが、近年では、2つの試みが目を引く。1つ目は、ポーランド語を介して「分割国境を跨いだ」、あるいは「間国家的な」専門家ネットワークに関する研究である<sup>7</sup>。また2つ目に挙げられるのは、健康と近代化とネイション・ビルディングという問題系をポーランド史の文脈で接続したとされるワルシャワ・ポジティヴィズムから、政治的腐敗とともにネイションの病理の克服を目指した戦間期の「サナツィア（浄化）」体制にいたるまでの知識人の軌跡を描く研究である<sup>8</sup>。これらは、分割国境によって、また独立の前後によって空間的・時代的に分断されてきた歴史像の総合にむけて、非常に有意義な視角を提供している。しかし、医療哲学の歴史を論じるボジェナ・プウォンカーシロカが、まだ制度的に未整備であった1918年以前の段階から学術的に優れた仕事を成し遂げた医師や学者に注目すべきだと述べる点に、医療史全体に広くみられる認識が現れている<sup>9</sup>。つまり現状では、エリート医師に焦点があたりがちで、ローカルな場で医療を実践していた医師が等閑視されるという問題がある<sup>10</sup>。そこで本稿では、「地方」という概念の意味に注目しつつ、19世紀末にポーランド王国に現れた地方医師集団を知識人のハイアラーキーに位置づけ、その研究意義を明らかにしたい。

## 1. 地方医師の存在主張

1911年、ウッチ医師協会で図書係を務めるズジスワフ・プレフネルは、1901-1910年のポーランド語医学系学術誌における地方医師のプレゼンスを数値にまとめた（図1）。これは、1911年にウッチ市で開催された第一回ポーランド王国地方医師大会のために用意されたものである。プレフネルが設定したカテゴリーには、ワルシャワやクラクフなどの「中心都市 *stolica*」に対置され、文化的に「遅れた」都市・小都市・農村を包摂する「地方 *provincia*」という当時の認識が反映されている。ここでは、ロシア帝国のポーランド王国内部でワル

---

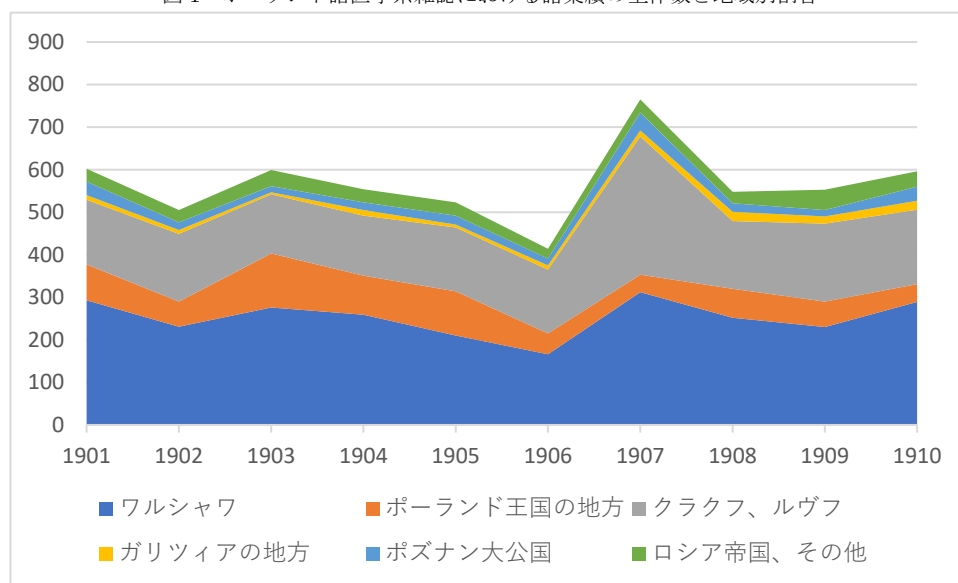
<sup>7</sup> Jarosław Cabaj, *Walczyć nauką za sprawę ojczyzny. Zjazdy ponadzaborowe polskich środowisk naukowych i zawodowych jako czynnik integracji narodowej (1869-1914)* (Siedlce: Wydawnictwo Akademii Podlaskiej, 2007); Aleksander Łupienko, “Urban Knowledge Transfer between the Cities of Warsaw, Krakow, Lviv and Poznan at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries,” *Zeitschrift für Ostmitteleuropa-Forschung. Journal of East Central European Studies* 67-4 (2018): 578-600.

<sup>8</sup> Katharina Kreuder-Sonnen, “From Transnationalism to Olympic Internationalism: Polish Medical Experts and International Scientific Exchange, 1885-1939,” *Contemporary European History* 25-2 (2016): 217; Katrin Steffen, “Experts and the Modernization of the Nation: The Arena of Public Health in Poland in the First Half of the Twentieth Century,” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 61-4 (2013): 583.

<sup>9</sup> プウォンカーシロカは、『医療史・医療哲学研究集成 *Archiwum Historii i Filozofii Medycyny*』（1925年創刊）や『科学史・技術史季刊 *Kwartalnik Historii Nauki i Techniki*』（1956年創刊）と並び、ポーランドの医療史研究において重要な専門誌『近代医療 *Medycyna Nowożytna*』（1994年創刊）で、1994-2004年の間、副編集長を務めた研究者である。Bożena Płonka-Syroka, “An Overview of the Polish School of Medical Philosophy from the 19th Century to Today,” *Journal of Pharmacy and Pharmacology* 2 (2014): 509-526.

<sup>10</sup> 例外として、以下の論稿がある。Jarosław Cabaj, “Zjazdy środowisk medycznych Królestwa Polskiego 1908-1914,” *Kwartalnik Historii Nauki i Techniki* 51-2 (2006): 99-122; Wojciech Jaworski, “Prowincjonalne towarzystwa naukowe w Królestwie Polskim w drugiej połowie XIX wieku i na początku XX wieku,” *Kwartalnik Historii Nauki i Techniki* 51-2 (2006): 195-201.

図1 ポーランド語医学系雑誌における諸業績の全体数と地域別割合



プレフネルが利用した雑誌資料

- ・ワルシャワで出版：『医学学報 *Gazeta Lekarska*』（1866-1921）、『産科学 *Ginekologia*』（1903-1905）、『結核 *Gruźlica*』（1909-1910）、『歯科学報知 *Kronika Dentystyczny*』（1906-1939）、『医学報知 *Kronika Lekarska*』（1879-1907）、『医学批評 *Krytyka Lekarska*』（1897-1907）、『医療 *Medycyna*』（1873-1907）、『ポーランド神経科学 *Neurologia Polska*』（1910-1951）、『診療読本 *Odczyty Kliniczne*』（1889-1920）、『ワルシャワ医師協会活動報告 *Pamiętnik Towarzystwa Lekarskiego Warszawskiego*』（1837-1937, 1997-）、『外科学評論 *Przegląd Chirurgiczny*』（1893-1905）、『外科学・産科学評論 *Przegląd Chirurgiczny i Ginekologiczny*』（1909-1914, 1918）、『皮膚病・性病評論 *Przegląd Chorób Skórnych i Wenerycznych*』（1905-1920）、『衛生 *Zdrowie*』（1885-1933）
- ・クラクフ、ルヴフ、ポズナンで出版：『ルヴフ医学週報 *Lwowski Tygodnik Lekarski*』（ルヴフ、1906-1921）、『医学新報 *Nowiny Lekarskie*』（ポズナン、1889-1950）、『眼科学の進歩 *Postęp Okulistyczny*』（クラクフ、1899-1914）、『衛生学評論 *Przegląd Higieniczny*』（ルヴフ、1902-1914）、『医学評論 *Przegląd Lekarski*』（クラクフ、1862-1921）、『小児科評論 *Przegląd Pediatryczny*』（クラクフ、1908-1917）、『医学年報 *Rocznik Lekarski*』（クラクフ、1906-1917）
- ・地方で出版：『医学雑誌 *Czasopismo Lekarskie*』（ウッチ、1899-1908）

〔典拠〕 Zdzisław Prechner, “Udział lekarzy prowincjonalnych Królestwa Polskiego w piśmiennictwie lekarskim w pierwszym lat dziesiątku bieżącego stulecia,” *Przegląd Lekarski oraz Czasopismo Lekarskie* 50-22 (1911): 329 より作成。

シャワとその地方とが、ハプスブルク帝国のガリツィア内部でクラクフおよびルヴフ（リヴィウ）とその地方とが、さらにポズナン大公国（プロイセン領ポーランド）とポーランド王国を除くロシア帝国およびその他とが分けられた。そして、図1で利用された雑誌資料の出版地を整理すると、ワルシャワ14点、クラクフ4点、ルヴフ2点、ポズナン1点、ウッチ1点となる。これらは、中心都市では、複数の、専門性をもち、長期的に維持された雑誌が出版されたのに対して、地方では『医学雑誌』のみが出版されたことを意味する。そしてこの『医学雑誌』こそ、個々の地域に漠然と分かれていた医師を「地方医師」としてまとめる役割を果たした<sup>11</sup>。さらにプレフネルによれば、1904-1906年に全体の数が減

<sup>11</sup> 福元健之「ワルシャワ・ポジティヴィズムの後継者たち——地方医療における思想・組織・実践」『東欧史研究』39号、2017年、23-39頁。

少したのは、日露戦争や 1905 年革命による混乱のためで、1907 年に増加に転じたのは、第 10 回ポーランド医師・自然科学者大会（ルヴフ市）が開催されたためである。全体の期間を通じての平均比率は、ワルシャワ 44.5%、クラクフおよびルヴフ 30.6%、ポーランド王国の地方 12.8%、ロシア帝国およびその他 5.7%、ポズナン大公国 4%、ガリツィアの地方 2.2%であった<sup>12</sup>。もっとも、ポーランド語だけが医師の使用言語であったわけではない。ドイツに留学してからエミール・フォン・ダンゲルンと血液の遺伝性を研究し、スイスで職をえたルドヴィク・ヒルシュフェルトのような医学者には、ドイツ語が論文の言語であった<sup>13</sup>。ワルシャワ大学でも、医学生は日常的に外国の文献を読み、ローベルト・コッホとルイ・パストゥールの両方に師事したオド・ブイヴィドもそうした学生のひとりであった<sup>14</sup>。プレフネルの統計は、ポーランド分割によって成立した国境線を前提にしつつも、ポーランド語を通じて結びつけられる知識人の存在を確認し、そのなかに地方医師を埋めこむ実践であったと理解できる。

それでは、数として示された成果の質はどうであったのか。この点については、第一回ポーランド王国地方医師大会で、最初に報告を行ったチェンストホーヴァ市の医師ヴワデイスワフ・ビェガンスキが論じた<sup>15</sup>。ビェガンスキの報告は、小説家ステファン・ジェロムスキの『才女 *Silaczka*』（1895 年）からの引用で始まった。同作品のモチーフは、懐は寂しくとも頭は啓蒙と文化の理想であふれた若き医師が、とある地方の小都市で悪徳薬剤師と医師助手との闘争を開始するが、周囲の環境になじめず、やがて薬剤師らと徒党をくむようになるというものである。これは、社会的に地方医師がいかに認識されていたのかを示す事例といえる。こうした認識に対して、ビェガンスキによれば、作家の描いた医師の変身を防ぐために、患者としての農民と接する地方医師は、農民の文化や習俗を理解するための「創造的・理想的な活動」に従事するのだとされた<sup>16</sup>。民衆のことを理解し、彼らの信頼をえることは、科学的な治療を広めることのみならず、地方医師の収入を安定させることにもつながる重要な課題であった。ビェガンスキは、医師に患者への共感を求めた著作『医学論理学、医学認識批判』において、患者の身体を客体とみなす点でドイツ医学を批判したが<sup>17</sup>、ドイツにおけるほど社会的地位の確立していない地方医師にとっては、

<sup>12</sup> Zdzisław Prechner, “Udział lekarzy prowincjonalnych Królestwa Polskiego w piśmiennictwie lekarskim w pierwszym lat dziesiątku bieżącego stulecia,” *Przegląd Lekarski oraz Czasopismo Lekarskie* 50-22 (1911): 328-329.

<sup>13</sup> Katrin Steffen, “Experts and the Modernization of the Nation,” 574-590; Id., “Ludwik Hirszfelf, the Great war, and Seroanthropology: Expectations and Unfulfilled Promises,” *Ab Imperio* 2 (2016): 125-152.

<sup>14</sup> Kreuder-Sonnen, “From Transnationalism to Olympic Internationalism,” 207-231.

<sup>15</sup> *Pamiętnik pierwszego Zjazdu Lekarzy Prowincjonalnych Królestwa Polskiego w Łodzi, dnia 4 i 5 czerwca r. 1911-go, oraz obchodu XXV-lecia istnienia Towarzystwa Lekarskiego Łódzkiego, d. 3 czerwca r. 1911-go* (Łódź, 1911), 10-11.

<sup>16</sup> Władysław Biegański, “O pracy naukowej lekarza prowincjonalnego,” *Przegląd Lekarski oraz Czasopismo Lekarskie* 50-22 (1911): 324-328. タイトルの才女とは、医師とは異なって信念を貫ぬくも、病に倒れた女教師のことである。

<sup>17</sup> Władysław Biegański, *Logika medycyny czyli krytyka poznania lekarskiego* (Warszawa: Skład Gł. W Księgarni E. Wendego, 1908); Agnieszka Raniszewska-Wyrwa, “Myśl etyczno-medyczna Władysława Biegańskiego (1857-1917),” *Studia Philosophiae Christianae* 49-3 (2013): 54. ビェガンスキの同著作は、Władysław Bieganski, autorisierte Übersetzung von A. Fabian, *Medizinische Logik: Kritik der ärztlichen Erkenntnis* (Würzburg: Curt

患者への理解を示すことに経済的な利点もあったと考えられる。現実の医師と患者の関係がビェガンスキの描いたとおりであったわけではないが、集団としての職業意識の模索は、1914年の第二回ポーランド王国地方医師大会（ルブリン市）にて公表された医療倫理綱領草案をもって、ピークを迎える。

## 2. 隠された中心性

さて、前節では、地方医師の存在を自明のこととして語る言説を取りあげてきた。しかし、上述の医療倫理綱領草案は、ワルシャワやルヴフで採択された2つの綱領をモデルにしており、文面のほとんどがそれらに依拠した<sup>18</sup>。彼らの言葉を同時代の言説に位置づけるとき、「地方医師」としてではない彼らの姿もまた明らかとなるのである。

レスワフ・サドフスキによれば、19世紀初頭までに、ポーランド語の地方は、中心都市（図1でいう、ワルシャワやクラクフやルヴフ）に対置される、行政的あるいは文化的な後背地という意味をもっていた。一月蜂起のあとには、科学と労働とによって社会を改革するワルシャワ・ポジティヴィズムが台頭するが、その潮流に属するジェロムスキのような作家は、文明から隔てられたものとして地方を描き、そこで知識人が文明化に貢献することの困難さや幻想性を表現した<sup>19</sup>。興味深いことに、同時代のロシアでも、中心都市と地方の関係はほとんど同様に語られたとされる。アン・ラウンズベリによると、洗練されたモスクワおよびペテルブルクこそが現象に意味を付与する秩序を与える空間なのであり、地方はそうした力をもたない空っぽの器にすぎず、リャザンとトヴェーリの間の違いなど些細なこととして描かれた。ロシア文学においても、中心都市と地方の主従関係というモチーフは再生産されたとされ、そこで西洋との関係が基準となっていることを踏まえると、中心／地方の問題は、西／東というより普遍的な問題にもつながる<sup>20</sup>。

本稿の対象とするポーランドの地方医師に目を戻すと、一方に、概念や活動モデルや方

Kabitzsch, 1909) としてドイツ語に翻訳され、富士川游と淀野耀淳の共著『医科論理学』南江堂、1911年で、「この書大体に於てビェガンスキの書、マグヌス及びプリンチング等諸家の著述に拠りたれども」とあるように、日本の医学史家にも読まれた。富士川らは、「露国ワルソウのカルピンスキー」（ティトウス・ハウピンスキ）とその弟子「クラムスチーク」（ジグムント・クラムシュティク）にも言及しており、ドイツ語を介してポーランドの医師について知識を得ていたようである。引用は、『医科論理学』『富士川游著作集 第6巻 医科論理学・典籍』思文閣出版、1981年、6、12頁から。ドイツとの関係を軸に、日本とポーランドの医学史的軌跡を比較することも、興味深い論点であるように思われる。ビェガンスキ、ハウピンスキ、クラムシュティクらについては、Piotr Müldner-Nieckowski, *Biegański, Kramsztyk i inni. O nowej etyce lekarskiej w XIX-wiecznej Warszawie* (Warszawa: Oficyna Wydawnictwo Volumen, 2016) を参照。

<sup>18</sup> “Projekt kodeksu etyki lekarskiej,” *Pamiętnik II-go Zjazdu Lekarzy Prowincjonalnych w dniach 31 maja i 1 czerwca 1914 roku w Lublinie* (Lublin, 1914), 185-194.

<sup>19</sup> Lesław Sadowski, *Polska inteligencja prowincjonalna i jej ideowe dylematy na przełomie XIX i XX wieku (na przykładzie Guberni Łomżyńskiej, Suwalskiej i Białostoku)* (Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1988), 33-48.

<sup>20</sup> Anne Lounsbury, “Provinces, Regions, Circles, Grids: How Literature Has Shaped Russian Geographical Identities,” [in:] Edith W. Clowes, Gisela Erbslöh and Ani Kokobobo, eds., *Russia's Regional Identities: The Power of the Provinces* (London: Routledge, 2018), 43-69.

法を生産する中心都市があり、他方にはそれを受容し消費する地方があるという構造を指摘できる。実際に『医学雑誌』の編集者の多くはワルシャワ大学医学部出身者であり<sup>21</sup>、図1に照らしても、地方は知識や人材の供給をワルシャワやクラクフ、ルヴフに依存した。この構造においては、地方は自律した価値をもたず、すべては外部から注入されるものとなる。自らを「地方医師」と自称した医師たちは、文明化あるいは中心都市のエージェントであったのである。ただし、事情はさらに込み入っており、実際には地方概念の無効性を唱える意見もあった。第二回ポーランド王国地方医師大会において、ワルシャワのユーゼフ・ザヴァツキは、図1が示すように知識の共有が広がっていることから、医師間の中心都市／地方の区別をやめるよう主張した<sup>22</sup>。また、ロシア帝国北西諸県から投書をしたナポレオン・チャルノツキによれば、大都市と農村・小都市との区分がより実態に即するものであった<sup>23</sup>。これらは一見すると「中立」かつ「客観的」な見解に見えるが、前者は、設備や資源の無い環境では知識の共有も無意味である点を無視し、後者には、そうした環境における医療を低位のものともみるまなざしがあった<sup>24</sup>。地方概念を肯定するかどうかにかかわらず、中心都市を基準とするハイアラーキーが言説を規定したのである。

それでは、この知的な構造のなかでは、地方医師と表象された医師は、中心都市の医師と本質的には等質、あるいは従属的な二級の医師ということになるのだろうか。しかし、もしこのことを肯定するならば、すべての意味がワルシャワやクラクフでつくられるという同時代の認識や、そうした認識に大きく規定されてきた研究史と同じ立場をとることになる。地方医師を自称する集団の出現という現象は、中心や自分たちの現状に対して広く共有された不満や問題意識がなければ起きなかったものであり、自ら地方を積極的に引き受けた医師の主体性は、ここで看過されてはならない。

図1において唯一地方から出版された『医学雑誌』の編集で中心的役割を果たしたセヴェーリン・ステルリングは、先のザヴァツキと同じ場にて、地方医師の存在意義を次のように述べる。つまり、地方医師は、「医学的才能の発展 *rozwój talentów lekarskich*」に貢献したのであり、その才能とは、設備が整っていなくても診断の頼りとなる「感受性 *wrażliwość*」や「観察力 *sposzrzegawczość*」などである。そして、『医学雑誌』の後を継ぐ地方医師のための雑誌を求める声に対して、彼は、医療を普及させるための研究論文ではなく、「独自の文筆活動 *praca literacka samodzielna*」のための雑誌をつくるべきだと語った<sup>25</sup>。ウッチ市で仕事をしたユダヤ人医師であるステルリングは、戦略としての地方医師を推進する立場にあった。結核対策の専門家としての一面をもち、イギリスやドイツの動向に目

<sup>21</sup> 福元、「ワルシャワ・ポジティヴィズムの後継者たち」、23-39頁；Płonka-Syroka, “An Overview of the Polish School of Medical Philosophy from the 19th Century to Today,” 514.

<sup>22</sup> *Pamiętnik II-go Zjazdu Lekarzy Prowincjonalnych w dniach 31 maja i 1 czerwca 1914 roku w Lublinie* (Lublin, 1914), 77-79.

<sup>23</sup> Napoleon Czarnocki, “Odcinek. W sprawie podniesienia poziomu medycyny prowincjonalnej (głos dyskusyjny),” *Gazeta Lekarska* 49-35 (1914): 965-970.

<sup>24</sup> Czarnocki, “Odcinek,” 970.

<sup>25</sup> *Pamiętnik II-go Zjazdu Lekarzy Prowincjonalnych*, 77-79.

を配り、ワルシャワで出版された雑誌『結核』の編集にも従事した彼が、表現の世界に仲間とともに閉じこもろうとしたとは考えられない<sup>26</sup>。上述の見込みには、中心都市とは異なる労働環境にある自分たちの経験を語る媒体が念頭に置かれていたのであろう。しかし、管見の限りそうした媒体は実現しなかった。「才能」も「感受性」も「観察力」も、教科書のことのように他者に伝えることは難しい。日々の労働を通じて磨かれるセンスを重視しようとした彼の主張自体に、地方医師の価値なるものが経験に依存するしかないことが露呈している。既に確認したように、ロシアでもポーランドでも、文学が地方に対する中心の優位性を前提にすることもあり、創作が地方医師の援軍となってくれるわけでもなかったのである。

しかし、それでも、ステルリングらは地方医師という標語のもと、『医学雑誌』に続いて、独自の大会を開催するだけの運動を展開した。他方で、地方を表明する以上は、常に中心都市の強力な影響下に置かれたのであり、彼らの自律性を過大評価はできない。管見の限り、彼らの間でロシア語で地方とされたようなトヴェーリヤシベリアとの連帯が論じられたことはなかった。ステルリングらのいう地方は、あくまでポーランド語の中心都市に対置されて意味をなし、これは台頭するナショナリズムと親和性を明らかにもつものであったといえるであろう。ただし、こうした親和性がポーランド国家の独立に結びつくのは第一次世界大戦の過程においてなのであり、それまではプレフネルの統計にあったように、分割による国境線が、政治的にはポーランド知識人たちの行動の前提にあったと筆者は考えるが、この点については別の機会に論じたい。

## 結び

ここまでの考察から、次のようにいえよう。地方医師が自らを語ることはなかった。ステルリングやプレフネルやビェガンスキといった医師が、中心都市と共有された言語によって、地方医師の名のもとに語っていたのである。歴史の中に地方医師は確かに存在した。しかし、それは医師個人の属性というよりも、集団の枠組や運動の戦略としてであったと理解できる。地方独自の価値が経験に依存する未確立なものであったとしても、それは中心都市とは異なる方向へと集団を動かし、同時代における知のハイアラーキーをより鮮明に照らし出したのである。中心都市でも熟達した医師の経験は重要であったはずだが、地方では、より反省的に経験について言及された。ただし、史料に現れる「経験」は地方医療の推進戦略とも密接に関わっており、批判的に読解するべきであることは言うまでもない。ブイヴィドやヒルシュフェルトのようなエリートのみならず、ステルリングやプレフネルのような医師を視野に入れることで、知識人のネットワークは、平板で対等な関係よ

<sup>26</sup> 福元健之「20世紀初頭ポーランドの衛生改革論——地方医師からみる」『歴史と経済』242号、2019年、18-34頁を参照。

## 地方医師は自らを語ったか

り、中心と周縁の構造化をすすめるシステムとして捉えることができるし、専門知識が実際のところ社会でいかなる意味をもったのかを考察できる。本稿と並行して準備した論稿では、ポーランド王国地方医師大会の場において医師が何を議論し、(中心の言語に規定されているとはいえ)医療倫理綱領草案にいかなる意味での独創性がみいだせるのか、医師としてのモラルと経済的生活とのバランスをいかに保とうとしていたのかを明らかにする予定である。

また、地方医師という対象は、彼らがいかにポーランド国家に吸収されたのかを考察するならば、先行研究が陥りがちな国民史を批判できるという利点もあるように思われる。本稿ではこのことについて論じることはできなかったが、今後は、第一次世界大戦期の問題に取り組み、ワルシャワ・ポジティヴィズムの時代から戦間期にいたるまでの知識人の相貌を地方の文脈から明らかにしたい。

【付記】本稿は、平成31年度(令和元年度)日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の成果の一部です。また、リシャルダ・チェプリスーラスティニス氏の文献を快く利用させていただいた早坂眞理先生に、心より感謝いたします。

(日本学術振興会特別研究員 PD)